

contents

ストラスブル美術館展	[2~3]
平成23年度 新収蔵品紹介 (イベント報告)	[4~6] [7]
岡島コレクション展	
久世建二 3.11へのオマージュ 記念対談	
お知らせ・貸館情報	[8]
福井県立美術館 次回の展覧会案内	[8]

表紙：ポール・ゴーギャン《ドラクロワのエスキースのある静物》部分 1887年頃(ストラスブル展より)



ゴーギャン、ピカソからローランサンまで

ストラスブール 美術館展

ドイツと国境を接している、フランス北東部のアルザス地域圏の首都ストラスブールは、10館にも及ぶ美術館・博物館を擁し、古代の彫刻や絵画、近・現代美術、装飾美術をはじめ、考古学、民族学、歴史、動物学に至る多岐にわたるコレクションを所蔵しています。

中でも、建築家アドリアン・ファンシルベールの設計で1998年に開館したストラスブール近・現代美術館は、欧州評議会やEUヨーロッパ議会のある今日のストラスブールの顔として、またヨーロッパの未来の象徴として構想された重要な美術館です。コレクション総数は18,000点にも及び、その内容は、印象主義から現代の新しい美術の動きまでを網羅したもので、その規模は、パリ以外ではフランス最大の近・現代美術館といえます。

本展は、ストラスブール近・現代美術館のコレクションを中心に、コルマルのウンターリンデン美術館、香川県立ミュージアム、小野コレクション(福井市)等からも貴重な作品をお借りし、シスレー、ゴーギャン、ボナール、マリー・ローランサン、マグリット、ピカソ他59作家83点(小野コレクションの賛助出品等を含めると60作家97点)の作品によって、近・現代ヨーロッパ美術を紹介するものです。

本展では、19世紀後半から20世紀後半までのほぼ1世紀の間に活躍した作家の作品を、「象徴主義」、「印象主義からフォーヴィスムへ」、「キュビズムとエコール・ド・パリ」、「両大戦間期の写実主義」、「抽象からシュール・レアリスム」、「1960年以降、コンテンポラリー・アート」の六章に分けて紹介いたします。



1.

「象徴主義」

19世紀末のヨーロッパで起きた芸術運動。写実主義やアカデミズムに反対して、人間の内面や神秘など、目に見えないものを象徴的に描こうとした。フランスでは、総合主義を提唱したポール・ゴーギャン、ボン・タベン派の画家、ナビ派、ギュスターヴ・モロー、オディロン・ルドン等が代表的画家。また本章に分類されているダンテ・ガブリエル・ロセッティは、フランス象徴主義の先駆とされるイギリスのラファエル前派の代表的画家。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎ダンテ・ガブリエル・ロセッティ
《解放の剣にキスをするジャンヌ・ダルク》
1863年 油彩・カンヴァス (画像1)
- ◎ポール・ゴーギャン《ドラクロワのエスキースのある静物》1887年頃 油彩・カンヴァス (表紙画像)
- ◎ウジェーヌ・カリエール《ガブリエル・セアイユと娘の肖像》1893年 油彩・カンヴァス
- ◎アリストイド・マイヨール《パニユルスにあるトゥルーレ家の農家》1895頃 油彩・板 (画像2)
- ◎モリス・ドニ《室内の光》
1914年頃 油彩・カンヴァス

他

「印象主義からフォーヴィスムへ」

印象派の画家たちは、19世紀後半に、光や空気まで描こうとしたモネ、ピサロ、シスレー等に代表される写実主義の画家



2.

会期◎2012年

4/20金～5/20日

休館日◎5月14日(月)／開館時間◎午前9時から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)、
※5月19日(土)、20日(日)は午後7時まで(入館は午後6時30分まで)／観覧料◎一般1,000円(団体800円)、大高生700円(団体560円)、中小生500円(団体400円) ※団体は20名以上
※学生割引は学生証の提示が必要です ※身体障害者手帳等所持者とその介護者1名は半額(ただし障害者手帳等に介護印のある方のみ)／主催◎「ストラスブール美術館展」実行委員会(福井県立美術館、福井新聞社、FBC福井放送)／会場◎福井県立美術館／後援◎フランス大使館／協力◎エールフランス航空

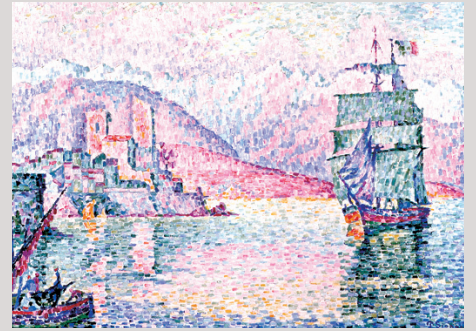




3.



4.



5.

たち。その後、印象派を母体として生まれたゴッホ、ゴーギャン、セザンヌや新印象派などポスト印象派の画家たちから批判的に乗り越えられ、20世紀美術への扉が開かれた。本章では、印象派からポスト印象派、20世紀最初の美術運動フォーヴィスムまでの画家の作品を紹介。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎アルフレッド・シスレー 《家のある風景》1873年 油彩・カンヴァス (画像3)
- ◎アンリ・マルタン 《古い家並み》1910年 油彩・カンヴァス (画像4)
- ◎ポール・シニャック 《アンティープ、夕暮れ》1914年 油彩・カンヴァス (画像5)
- ◎ピエール・ボナール 《テーブル上の果物鉢》1934年頃 油彩・カンヴァス (画像6)
- ◎モーリス・ド・ヴラマンク 《都市の風景》1909年 油彩・カンヴァス

他

「キュビズムとエコール・ド・パリ」

キュビズムは、1907年頃から14年にかけて、主にピカソとブラックによって進められた絵画上の革命的な運動。ルネサンス以来の遠近法などの技法を駆使した対象の描き方を完全に捨て去るだけでなく、全く革新的な立体の再構築法を創造した。

エコール・ド・パリは、両大戦間を中心



6.

とした時期に、パリに住んで活動した外国人画家たちで、どの流派にも属さず、哀愁に満ちた作品を描いた画家たち。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎フェルナン・レジェ 《青と赤の静物》1938年 油彩・カンヴァス
- ◎パブロ・ピカソ 《座る女性の胸像》1960年 油彩・カンヴァス
- ◎ジョルジュ・ブラック 《静物》1911年 油彩・カンヴァス
- ◎マリー・ローランサン 《マリー・ドルモワの肖像》1949年 油彩・カンヴァス (画像7)

他

「両大戦間期の写実主義」

近代的な武器で未曾有の犠牲者を出した第1次世界大戦は美術にも大きな影響を与えた。戦後フランスでは、秩序への回帰や人間性の回復を目指して、より伝統的な具象表現が中心を占めるようになった。またドイツでは、戦後しばらくは、敗戦国ドイツの現実に絶望した若い画家たちが社会に対する批判的な目から表現主義的な作品を制作したが、1920年代中頃から、より客観的な実在感を求めるリアリズム絵画を特徴とする新即物主義が興隆した。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎フェリックス・ヴァロットン 《水辺



7.

で眠る裸婦》1921年 油彩・カンヴァス

- ◎マックス・ベックマン 《バイエルンの兵士の肖像》1915年 墨・鉛筆・紙

他

「抽象からシュール・レアリスム」

抽象絵画は1910年代の初頭には始まり、シュール・レアリスムは、1924年のアンドレ・ブルトンによる「シュール・レアリスム宣言」に始まった。両方ともモダンアートの中でも最も重要とされる美術運動として世界的な影響力を持った。また両方の美術運動に関わった画家もいる。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎ヴァシリー・カンディンスキー 《コンポジション》1922年 インク・厚紙に貼り付けた紙
- ◎ジャン・アルプ 《ダンサー》1926-55年 油彩・カンヴァス
- ◎マックス・エルnst 《2人の若い裸婦》1926年 油彩・カンヴァス
- ◎アンドレ・マッソン 《魚に攻撃される馬》1932年 油彩・カンヴァス
- ◎ルネ・マグリット 《旅の思い出》1926年 油彩・カンヴァス

他

「1960年以降、コンテンポラリー・アート」

ストラスブール近・現代美術館が収集しているこの分野の作品はドイツとフランスのものが中心となっている。本章に展示される作品は8作家11点で、この分野の収集の特徴を表す作品となっている。

本章に展示される主な作家および作品名

- ◎ジェラルド・ガジョロフスキー 《宿命或いは家族の絆、もうひとりのマルゴ》1972年 アクリル・カンヴァス
- ◎A.R.ベンク 《システムビルド》1967年 油彩・カンヴァス

他

新収蔵品紹介

福井県立美術館では平成23年度に寄贈56点の作品を新しくこれらの作品は、4月5日(木)～6月10日(日)のテーマ展で前期、



(左隻)



(右隻)

1. 狩野常信 『花鳥図屏風』

《寄贈》

日本画

1. 狩野常信『花鳥図屏風』

17世紀(江戸時代) 六曲一双屏風
(各)159.8×367.6cm 紙本金地着色
岩丸彌市氏 寄贈

狩野常信は狩野探幽の弟・尚信を祖とする幕府奥絵師・木挽町狩野家の二代目で、江戸時代の狩野派では探幽と並ぶ名手として評価されてきた絵師です。本作は右隻に松、桜、早蕨に白鷺の親子、小禽などを配し、左隻には竹林、薔薇、鶏の親子に同じく小禽を描き、雲霞と流水で両隻を繋いでいます。雲霞は源氏雲を金箔押し、霞を種類の異なる金の砂子に大小の切箔を交えた複雑な構成としています。また樹木や鳥をいずれも丁寧な筆致で色鮮やかに描いており、それらが金色の背景に映えて上品かつ装飾的な趣を創り出しています。複雑な金地、大きな余白、両隻を流水で繋ぐという画面構成や、華やかで瀟洒な画風には、江戸狩野の確立者として絶大な影響力

を残した、伯父・狩野探幽の様式が色濃く反映されています。当初のものと思われる屏風金具には三葉葵紋が付されており、本図の制作環境がうかがえます。松・竹、様々な鳥の親子、番という、親子・夫婦の愛情、子孫繁栄を暗示する吉祥的画題から、おそらくは徳川家ないしはその周辺での、婚礼といった慶事や儀礼的な場を飾るために描かれたものと考えられます。新出になる常信の花鳥図屏風の優品として貴重です。



2. 土屋圀代

『白韻』2-1

1998(平成10)年 225×180cm
紙本着色、額装

『風霜』2-2

2009(平成21)年 225×180cm
紙本着色、額装

『揺らら』2-3

2010(平成22)年 162×162cm
紙本着色、額装
土屋圀代氏 寄贈

福井出身の土屋圀代は美術大学で日本画

を専攻していましたが、福井の前衛美術運動である「北美」に出会い現代美術に転向し活発な活動を展開します。父親の死と米国体験を機に日本画に復帰し、現在まで院展を中心に活動しています。復帰当初は仏画を、近年は風景を題材としつつ、繊細な描写による死生観の表現を追求しています。「白韻」は仏画時代の代表作の一つで、生命力に満ちた女性像の趣もそなえています。「風霜」は繊細な描写により、打ち捨てられた風景の中にある種の無常観を漂わせます。「揺らら」は何気ない自然の描写の内に、生と死のモチーフを潜ませようとする、作家の現在の仕事を代表する作品です。

洋画

3. 森由太郎『雲動く桜島』

制作年不詳 1926～69年(昭和年間)頃
45.5×53.0cm キャンバス、油彩、額装
田中孝氏 寄贈

福井出身の森由太郎は、福井の重要な前衛美術運動である「北荘画会」に関わりなが

収蔵しました。なお、寄託は20点ありました。後期に分けて展示・紹介します。



2.3. 土屋罔代 『風霜』



2.2. 土屋罔代 『揺らら』



2.1. 土屋罔代 『白韻』



3. 森由太郎 『雲動く桜島』



4. 『五彩羅漢文盤』



5. 北川健次 『黒のオブジェ—あるいは停止するフランツ』

ら、二科展でも活躍し、地元で教職に就きながら後進の指導にも尽力した当県の重要な洋画家の一人です。本作は小品ながら、森が生涯に渡り追求した、独自の風景表現を知る上で貴重な作例といえます。作家は、具象を離れず色彩を抑制した穏健な画風で知られますが、本作では鮮やかな色彩と大胆な色面を用い、抽象化への志向も感じられます。

工 芸

4. 古染付等陶磁器作品 50点

中国・明～清時代(16～17世紀)、
日本・桃山～江戸時代(16～17世紀)
陶磁
財団法人 宇野茶道美術館 寄贈

宇野茶道美術館(福井県越前市)コレクションによる、16～17世紀にかけての中国および日本の陶磁器全50点です。そのほとんどが中国磁器で、なかでも明時代末期の天啓年間(1621～27)を中心に、江西省景德鎮の民窯で焼成された青花磁器—いわゆる染付のうち、日本向けに製作・輸入され、日本

で「古染付」と呼びならわされてきた作品が多くを占めます。ほかにも福建省南部の漳州地区で制作された具須染付や具須赤絵の大皿などがあります。また日本のものは唐津焼の大皿などがあります。

宇野茶道美術館は、宇野 熙氏(故人)が永年に亘り趣味として蒐集した茶道資料を展示して当地茶道文化の向上の資となることを目的に、平成8年4月に開館しましたが、このほど財団を解散し閉館することから寄贈を受けました。

そ の 他

5. 北川健次

『黒のオブジェ—あるいは停止するフランツ』
1998(昭和63)年 30×115.3×30cm
オブジェ、ミクストメディア、アクリル装
北川健次氏 寄贈

北川健次は、本県出身の美術家として、近年最も高い評価を得る作家の一人であるだけでなく、現代日本版画界を代表する作家といえます。版画の他にオブジェ、コラージュ、油彩画、写真、詩、評論も手がけ、鋭

い詩的感性と卓越した意匠性を駆使した作品は美術の分野において独自の位置を占めています。

北川は、20歳代前半より写真製版による銅版画の技法を開拓し注目されましたが、若くしてあまりに完成度の高い作品世界に到達したためか、程なく版画制作から遠ざかります。そうした表現の危機を脱し、現在につながる新たな世界へと導いたのは、オブジェという手法の発見でした。限定された空間を劇場に見立て、既成の映像や物体を鋭い詩的感性により自在に呼び寄せ結び合わせることで、濃密なイメージを醸成するオブジェ作品は、引用、虚構といった北川の創作原理の原器としてことさら重要です。

本作では、卑近な物体に最小限の手を加えることで、硬質かつ緊張感にあふれた客体を創出しており、北川の数少ない非イメージ的なオブジェ作品といえます。視覚的というより、触覚的ともいえる作風が、加納光於より激賞されたといえます。作年度当館が開催した、公立美術館では初となる個展「北川健次展 Kenji Kitagawa — 鏡面のロマネスク」への出品を契機に、作家より寄贈を受けました。



6.1. 島田墨仙 『孔明秋夜祭北斗』



6.2. 島田墨仙 『高駢』



6.3. 島田墨仙 『梅月』



7. 狩野安信 『竹虎図屏風』

(左隻)



(右隻)

《寄 託》

日本画

6. 島田墨仙作品 19点

個人蔵

島田墨仙(1867～1943)は福井生まれの日本画家。父である福井藩士島田雪谷、兄雪湖も画家です。橋本雅邦に師事し、官展を中心に活躍、歴史人物画に新境地を開きました。1943(昭和18)年「山鹿素行先生」で日本画部門初の帝国芸術院賞を受賞しました。

墨仙は人物の精神性をそのまま描き出す東西の先賢の肖像などに力を注ぐ一方、大正から昭和にかけて少年時代から親しんできた漢籍や故事を基とした、穏やかで詩情溢れる作品を数多く描いています。四季の移り

かわりを愛で、友と人生を楽しむ姿はまるで作家自身が画中に遊んでいるかのように評されました。しかし昭和15年以降は日本の偉人を描くことを専らとしており、中国人物を描いた作品は昭和14年以前の戦争が深まる以前のものと考えられます。

7. 狩野安信

『竹虎図屏風』 江戸時代(17世紀)
六曲一双屏風(各) 242.3 × 515.6cm
紙本金地着色
奈良県・浄福寺

本図は六曲一双の大画面に、竹林に遊ぶ5頭の虎を総金地に濃彩で描いた作品。作者は狩野探幽・尚信の末弟で、狩野宗家を継いで江戸幕府奥絵師となった狩野安信です。もと福井藩主・越前松平家に伝来した作品

で、昭和4(1929)年の同家の売立に出て以降、長らく所在不明でした。本図の松平家への伝来経路は不明ですが、当初のものと思われる縁金具には五三桐と三葉葵紋があることから、越前松平家ないしその周辺で詠えられた可能性が高いと考えられます。

本図の制作は落款から、安信の法眼叙任後から没するまで、すなわち寛文2(1662)年～貞享2(1685)年の間と知れます。今に残る安信の作品は少なくありませんが、本図はその大きさや出来栄において、安信晩年そして金地着色画の代表作に位置づけることができます。

なお、本図は各隻縦240、横500センチを優に超える大きさで、確認できる屏風の中では恐らく最大規模と考えられ、その制作には特別な事情があったことをうかがわせます。

「岡島辰五郎没後50周年記念

岡島コレクション展」

《イベント報告》

福井県大野市出身の岡島辰五郎氏が、ニューヨークで美術商を営む間に収集した日本の金工品を主とする岡島コレクションの展覧会が、岡島氏の没後50年にあたる今年の3月2日(金)から25日(日)に開催されました。そして期間中、講演会や各種のイベントが当館を会場に開催されました。

◎ワークショップ「純銀で岡島コレクションを作ろう」

(主催：岡島美術財団)

〔講師〕齋藤好子氏(アートクレイ倶楽部認定教室主宰)

〔日時〕3月3日(土) 10:00～、14:00～

* * * *

岡島コレクションの中から、龍・獅子・トンボなど動物や昆虫の目貫を、アートクレイシルバー(銀ねんど)で模し、ブローチ、バッチ、ペンダントを作ってみようというものです。ワークショップは午前と午後の2回開催され、約30組の親子が参加しました。好みの題材を選び、思い思いの作品を熱心に制作していました。また岡島氏の功績を紹介するミニ講座もあわせて開催されました。

◎記念講演会「日本刀と拵こしらえの美」

〔講師〕梅田光雪氏(御刀砥師)

〔日時〕3月18日(日) 14:00～

* * * *

岡島コレクションには多種多様な金工品がありますが、その中心をなすのが刀の外装(拵)を飾る目貫、縁頭といった刀装具です。講演会では県内在住の刀剣研磨師・梅田光雪氏を講師に、これまで携わってきた刀剣研磨における思い出深い作品との出会い、また刀と拵の関係とその魅力を、拵の実物を前に語っていただきました。参加者は日頃滅多に見ることのできない拵を前に、興味深げに聞き入っていました。



「日本刀と拵の美」講演会 梅田光雪氏



同左



岡島ワークショップ 会場風景



同上



同上



岡島ワークショップ 銀細工完成品

「久世建二
オマージュ 3・11への
記念対談」

《イベント報告》

県立美術館では3月2日(金)から25日(日)まで「久世建二 3.11へのオマージュ」展が開催され、期間中屋外展示場に計38体の墓標や人型を想わせる陶のオブジェが三重の円形に並べられました。また関連イベントとして、久世建二氏と金沢21世紀美術館長秋元雄史氏による記念対談が3月11日午後2時から行われました。1分間の黙祷で始まった対談の中で、久世氏はこれらのオブジェについて、時間の流れや人の生死のつながり等、東日本大震災への鎮魂もテーマだが、個々の形は、「土が教えてくれた形を作っているので、作品に込めた思いを説明するとほとんど後付けになる。物語性も後からきている」と語り、これに対して秋元館長が、「物語に即して形を作っていないので、逆にストーリーに広がりがある。見る側がいろいろなイメージを抱きやすい」と受けるなど活発な議論が交されました。参加者には熱心な人が多く、対談終了後も質問が続きました。



久世建二氏と秋元雄史氏



「3.11へのオマージュ」 会場風景



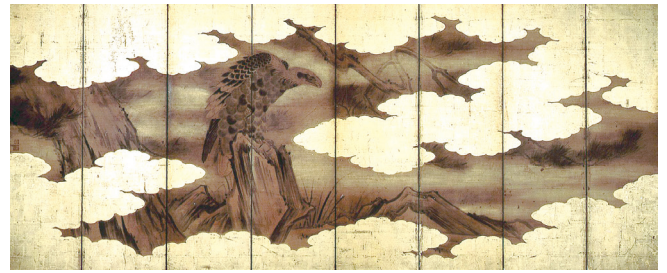
記念対談 会場風景

館蔵品が県の文化財に指定！

平成23年度の福井県指定文化財に、当館の館蔵品2点が指定されました。その詳細は下記の通りです。

『寒山拾得図』 曾我紹仙筆 1幅 室町時代

曾我紹仙（生没年不詳）は室町時代における水墨画の流派の一つ曾我派の絵師で、室町後期に活躍した人物です。曾我派は代々、御用絵師として越前朝倉氏に仕えたほか、京都の大徳寺を拠点としても活動しました。寒山拾得は中国唐時代に、天台山国清寺に住んでいたとされる伝説の隠者で、寒山は文殊、拾得は普賢菩薩の化身ともいわれ、特に禅宗で好まれた画題です。本図は松の下で背中合わせに眠る二人を水墨の手法で描いたもので、略画風の表現は中国南宋時代の画家の牧谿や梁楷の作品に倣ったもので、作例の少ない紹仙の作品としても貴重です。



(左隻)

『松柏に鷹図屏風』 曾我直庵筆 8曲1双 桃山～江戸時代

曾我直庵（生没年不詳）は、桃山から江戸時代初めにかけての絵師で、越前朝倉氏の御用絵師・曾我派の末裔ともいわれ、堺を中心とする畿内で活躍しました。本図は金雲たなびく八曲一双の大画面の両端に松柏の大樹を配し、その間に2羽の大鷹を水墨で描いた作品です。鷹図は直庵の得意とした画題で多くの作例が知られますが、本図のような連続した大画面に描いたものは珍しいといえます。また大樹や金雲を用いた表現は桃山絵画の典型的な様式であり、直庵の金地作品としても現存唯一の作例として、作者の代表作に数えられる大変重要な作品です。

お知らせ

◎5月～7月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。

5月14日(月)、21日(月)、22日(火)、6月4日(月)、11日(月)～22日(金)、7月2日(月)、9日(月)、17日(火)～26日(休)

貸館情報 [5/2～7/29]

5/2～5/6 ● フォトフレンズ写真展	5/24～5/27 ● 美山絵画教室展
5/2～5/6 ● Pino & 森の仲間たち	5/25～5/27 ● 第40回書法研究 五展
5/9～5/13 ● 第5回現代童画会福井地区展	5/30～6/3 ● 脇本公夫油彩展「今はまだ旅の途中」
5/10～5/13 ● 第33回萌展(日本画)	5/31～6/3 ● 第27回沙久羅会日本画展
5/16～5/20 ● 第12回フォト瞬写真展	6/1～6/3 ● 第35回千歳会書展
5/17～5/20 ● 第7回笑夢の会水彩画展	6/1～6/3 ● 福井県立藤島高等学校美術部展
5/24～5/27 ● 第21回日本画紫陽花展	6/7～6/10 ● 第62回県書道展・県現代書作家展

福井県立美術館 次回の企画展案内



▲浅野耕平「Garden」(C)kohei ASANO
協力:東京工芸大学インタラクティブメディア学科



▲小松宏誠「Secret Garden」(C)kosei KOMATSU

魔法の美術館

2012年7月27日(金)～8月26日(日)

会期中無休

色とりどりにきらめく光のオーロラ、光の中でそっと動き出す不思議な影たち — 本展は、光や映像、音を駆使した作品の数々を体で感じる「超体験型」の展覧会です。「見て」「触れて」「参加して」、子どもも大人もゲームのように楽しみながら鑑賞できる展覧会です。